

95 モーイ親方(ル)

(年若い馬・煙草は一回)

アサタビ(三司官)、今の代議士みたいなやつ、あれが選挙があつたらしい。だから、片一方からモーイもこのアサタビの資格は、異常だから、

「是非あれも取つたほうがいい」と。ところが片一方から、

「だめだ。まだ年が十七歳だからだめだ」と。そう言つたら、そういうふうな、また、そんな話があつたと。

「ああ、そうか」と。また田舎へ全部回つて。小さい馬買つて、それで首里城に見せに行つたて、わざと。だから、

「こんないい馬、あなたどつからこういうの買うてきたか」と言つて、みんなが珍しがつて。そういうふうと言つたら、

「そうだねえ。確かにいい馬だなあ。だが、これ、あしたつぶすよ」と言つたです。

「ああ、こんな馬つぶしてはもつたいない。琉球にこ

んないい馬はまたといないはずだから、これはつぶしてくるな」

「いやいや、これ、年が若くて何にもならん」。またも首里城はやられた。よくあれこれつて名物になつておる。

またこの人は、非常に煙草が好きだし、一日も煙草を。それで親父に、

「そんなに煙草をのんだらだめだから、やめろ」。一日に一服に決めたと。

「それでいいんだろう」。それで、もう、一日に一服。このなんだ、小間物屋行つて煙管を、いい煙管を作らして。昔は五匁の煙草というてあつた。あれを一日に今まで吸つておつた。いっぺんにこの五匁、刻み煙草を押し込んで、二階へ行つて、わざと吸つたら、もうこっちは伊野波^{ぬは}といつたらしい。伊野波の建物を伊野波御殿といつて。

「伊野波御殿は火事だ、火事だ」と言つてみんな集まつて来て、火を消しに来た。

また、それでね、道の屋敷の囲いに石つころの大きいやつがあつたから、二、三人で持ち切れん石があち

ここに転がつておったさ。ほしたら、
「それじゃ、せつかく集まってくれたから、家の回り
のあの石、どこかに片付けてくれ」と。いろんな、頭
が頓知で早くて。普通の人ではなかったらしいよ。

字北波平　大城清助